

# 西欧文明と地球環境問題

山口 正 春

## 目次

- 一 はじめに
- 二 キリスト教神学の教義
- 三 近代科学へのテイクオフ
- 四 近代科学の無神論的性格
- 五 一八世紀の啓蒙主義の特徴とその普及
- 六 結びにかえて

## 一 はじめに

近代科学が最初に西欧において誕生したという事態は、世界史の立場から見ても、きわめて重要な意味をもつ画期的な出来事であった。<sup>①</sup>地球上で、西欧だけが近代科学を生み出したのである。そして「近代科学は、近代の歴史や社会に根本的な影響を与えたというより、近代の歴史や社会そのものを形成したといえる。」<sup>②</sup>

さらに重要なことは、この近代科学は一八世紀後半から一九世紀末にかけて幾多の近代技術を生み、やがて科学と技術は手を取り合つて「技術としての科学」「技術のための科学」として人間生活の改善を目指して突き進み、二〇世紀になって満開期を迎え、豪華な果実をたわわにした。<sup>③</sup>この流れは二一世紀の今日においても変わらない。いずれにせよ科学技術は、人類に未曾有の物質的繁栄をもたらしたのである。<sup>④</sup>それでも人類は、さらなる豊かさを求め、その限りない欲望をエンジンとして経済成長を目指し続けている。

それと同時に、科学技術は二〇世紀に二度の世界大戦の大きな推進役を担ったし、またその科学技術も二度の世界大戦を通じて飛躍的に発展を遂げた。二〇世紀後半の半世紀には世界的規模の戦争が無かったおかげで、科学技術は物質的繁栄、利便さなど計り知れない恩恵を人類に与え、人間生活の質的量的向上に直接貢献することができた。これは、いわば科学技術の「プラスの効果」である。

しかしその副産物として発生したのが自然環境の破壊、人口増加<sup>⑤</sup>などの地球環境の諸問題であり、これらは、いわば科学技術の「マイナスの効果」である。<sup>⑥</sup>科学技術のマイナスの効果が顕著になったのも、二〇世紀という「科学技術文明の時代」の大きな特徴であったし、その後遺症は今も進行中であり、今後ますます深刻なものになっていくと

思われる。人類は科学技術の恩恵を手放しで喜ばなくなったのである。<sup>(7)</sup> 果して人類は、今後もそのような営みを続けていいものであろうか。

そもそも科学技術による物質的繁栄は、上述のように西欧において達成されたものである。科学技術を背景にもつ西欧文明は産業革命<sup>(8)</sup>によって、富と生産力の増大という点において、驚くべき力を発揮した文明であった。この文明のつくり出した富と生産力によって、西欧は世界を支配し、統一したのである。<sup>(9)</sup> そして非西欧文明圏に属する人々によつて、もっぱら賛美と模倣の対象であった西欧文明に人類の多くは、かつて何ら疑問を抱かなかつたと言つてよいだろう。

だが今や人類は、前述の科学技術のマイナスの効果、つまり地球環境の破壊を憂慮しつつ日々の生活を送っているのである。具体的には先にも少し触れたが、地球の温暖化、海洋汚染、森林の破壊、東日本大震災によつて生じた福島原発事故による土壌の汚染<sup>(10)</sup>など、例を挙げれば枚挙に遑が無い。したがつて西欧文明は、地球の環境問題によつて大きな壁に突き当たっているものであり、この文明では宇宙船地球号は、もはやにっちもさっちも行かないほどの状況にまで追い込まれているのではないか。われわれは住みよい地球環境を後世、子孫に残していく義務を負っている。

そこで地球環境の問題が生じた原因を改めて吟味してみると、西欧文明には西欧特有の世界観・自然観やキリスト教神学の教義が、大きな影響を与えていることが分かるのである。小論では、地球環境の問題を論ずるに際して、西欧文明を成り立たしめている特殊西欧的な世界観・自然観、そしてその基礎にあるキリスト教の教義を明らかにし、加えて環境問題解消の一助のために、それに代るものとして仏教の世界観・自然観を示し、併せて経済学の視点から

も、人類にとって住みよい環境を提供するために、若干の提案を試してみたいと思う。

- (1) 伊東俊太郎「イタリア・ルネサンスと近代西欧科学」（『文明における科学』、勁草書房、一九八〇年、所収）、一四二頁。
- (2) 下村寅太郎・小川国夫「魔術から科学へ」（『光があつた―地中海文化講義―』、朝日出版社、一九七九年、所収）、一四四頁。
- (3) 種田明『近代技術と社会』、山川出版社、二〇〇三年、三三―五四頁。
- (4) 田村正勝『新時代の社会哲学』（新装版）、早稲田大学出版部、二〇〇二年、三二頁。
- (5) 人口問題に関する文献としては、差し当たり次のものを参照。Barry Commoner, *Making Peace with the Planet*, 1982, pp.160, 166. Colin Mc Every and Richard Jones, *Atrass of World Population*, 1978, pp.353-55.
- (6) Cf. John Bellamy Foster, *The Vulnerable Planet: A Short Economic History of the Environment*, (rev. ed), 1999, ch. 1, 6. ジョン・ベラミー・フォスター『破壊されゆく地球：エコロジーの経済史』（渡辺景子訳）、こぶし書房、二〇〇一年、第一章六章を参照。
- (7) 志村忠夫『文明と人間―科学・技術は人間を幸福にするか―』、丸善ブックス、平成九年、一一一頁。
- (8) Cf. D. Whitehead, “The English Industrial Revolution as an Example of Growth,” R. H. Hartwell (ed), *The Industrial Revolution*, 1970, pp.3-27. 長谷川貴彦『産業革命』、山川出版社、二〇一一年も参照。
- (9) 梅原猛『哲学する心』、講談社学術文庫、二〇〇四年、二四四頁。
- (10) 梅原猛・稲盛和夫『近代文明はなぜ限界なのか―人類を救う哲学―』、PHP文庫、二〇一一年、四二頁。

## 二一 キリスト教神学の教義

そもそもキリスト教神学の教義においては、何よりもまず神を基本とし、出発点にしているところに著しい特色がある。つまり神が存在するがゆえに、この世界が存在するのであり、神が創造したがゆえに、この天地万物があるのである。そうして神の被造物のなかで、人間は特別の存在であった。人間は、神がその形のごとくに人を創造したと見なされ、いわば神にひとときに近い存在として、そのほかの自然物との間に一線が画された。すなわち動植物を含む他の自然物よりも、一段上位に君臨すると考えられたのである。<sup>(1)</sup>

『旧約聖書 創世記』には、神ヤハウェによる天地創造が語られている。

「始めに神が天地を創造された。地は混沌としていた。暗黒が原始の海の表面にあり、神の霊風が大小の表面に吹きまくっていた。<sup>(2)</sup>」

「そこで神が言われた、『われわれは人をわれわれの像の通りわれわれに似るように造ろう。彼らに海の魚と、天の鳥と、家畜と、すべての地の獣と、すべての地のの上に這うもの<sup>(3)</sup>とを支配させよう』と。そこで神は人を御自分の像の通りに創造された。神の像の通りに彼らを創造し、男と女に彼らを創造された。神は彼らを祝福し、神は彼らに言われた、『ふえかつ増して地に満ちよ。また地を従えよ。海の魚と、天の鳥と、地に動く、すべての生物を支配せよ』、さらに神が言われた、『見よ、わたしは君たちに全地の面にある種を生ずるすべての草と、種を生ずる木の実を実らすすべての樹を与える。それを君たちの食糧とするがよい。』<sup>(3)</sup>」

この『創世記』に見られる限りでは、神が自然（世界）を創造し、「神の似像」として人間を創り、人間が支配し、

食糧とするために自然が与えられている。したがって、もともとキリスト教神学の教義のなかには「自然支配」の思想、さらに「人間中心主義」<sup>④</sup>が包含されていたのである。いい換えれば、神が被造物界すべてに君臨するように、人間はそれ以外の被造物すべてにたいして君臨的な態度で臨むのである。自然を客体的に捉え、研究の対象あるいは利用の対象としてきた西欧人の自然にたいする態度は、結局ここに由来するといえよう。<sup>⑤</sup>

一三世紀には、スコラ哲学の体系を作り上げたトマス・アクィナスは、最も卑小な存在物から神に至るまであらゆる階層秩序が存在すると主張し、すべての生物は存在する理由があるものの、全体の秩序は神のみが知ると説いたのである。人間は特別な存在として動物の上位に置かれ、人間による自然の支配は、理性のある生き物が理性のない生き物つまり他の動物を支配すべきである、という神の論理的な聖なる秩序の一部分とされており、そのことは人間が他の動物を飼い馴らす能力を持っていると言うことによく表われているとされた。<sup>⑦</sup> こういった見方は、一六世紀の宗教改革によっても基本的に変化することはなく、改革指導者の一人ジャン・カルヴァンは、神が天地創造に六日間をかけたのは、最後に創られた人間に完全な世界を用意するためであり、「神は万物を人間のために作り給うた」<sup>⑧</sup>のだと固く信じていた。

リン・ホワイト・ジュニアは、人間中心のキリスト教神学について、次のように述べている。すなわち「キリスト教の、とくにその西方的な形式は、世界がこれまで知っているなかでも、最も人間中心的な宗教である。……人は神の自然にたいする超越性を大いに分け持っている。キリスト教は古代の異教やアジアの宗教（恐らくゾロアスター教は別として）とまったく正反対に、人と自然との二元論を打ち立てただけでなく、人が自分のために自然を搾取するところが神の意志であると主張したのである」<sup>⑨</sup>と。

人間を常に特別な存在としてみるキリスト教神学の教義は、その後の西欧思想にたいして大きな影響を与えた。たとえばニュートンと同時代のイギリスで、主として王立科学協会（ロイヤル・ソサエティ）を中心に活躍したロバート・フックは、その著書『ミクログラフィア』の序文を、次のような言葉で書き始めている。「われわれが、自然の働きを眺めたり、これによって何とか生命を維持したりすることができるだけでなく、さらに、さまざまな用途のために、これを考察し、比較し、変更し、助け、そして改善する力をもっていると言うことは、他の被造物に見られない、人類の一大特権である。<sup>10</sup>」

見られるように、これはまさに西欧世界で近代科学の誕生を可能にした自然観である。それは、この世界は、すべて神の被造物であり、そのなかで人間は特別な、他の被造物より一段高い被造物であるとする自然観である。他の被造物（自然）は、こうして人間から峻別され、一段下位のものとして、客体的な対象とされ、人間の利用と研究の対象とされるのである。

- (1) 筑波常治『肉食・肉食の文明』、NHKブックス、昭和五八年、八五頁。
- (2) 『旧約聖書 創世記』（関根正雄訳）、岩波文庫、一九九三年、九頁。
- (3) 同書、一一頁。
- (4) 鯖田豊之『肉食の思想―ヨーロッパ精神の再発見―』、中公文庫、二〇〇七年、八六―九一頁。
- (5) 澤井繁男『ルネサンス文化と科学』、山川出版社、一九九六年、五〇頁。
- (6) トマス・アキナスの見解は、西欧における社会論にも大きな影響を与えることになった。すなわち中世の社会観が、その背後にある神学的な宇宙観によって規定され、それを反映する形で作られている。実際、中世の社会観を真に理解しようと

すれば、中世のキリスト教の教義が提示する神を頂点とした階層秩序的な世界観を抜きにして考えることはできない。（甚野尚志『中世ヨーロッパの社会観』、講談社学術文庫、二〇〇七年、九頁、一二三頁。）

(7) クライブ・ポンティン『緑の世界史』（石弘之・京都大学環境史研究会訳）、朝日選書、上、一九九六年、二三七頁。）

(8) 同書、二三七頁。

(9) リン・ホワイト・ジュニア『機械と神―生態学的危機の歴史的根源―』（青木靖三訳）、みすず書房、一九七二年、八七―八頁。

(10) 渡辺正雄『文化としての近代科学』、丸善、平成三年、一八四頁より引用。

### 三 近代科学へのテイクオフ

ところでキリスト教神学の教義では、神による天地万物の創造、したがって自然現象すべてが神によって支配されるという考えをもたらしたわけであるが、神の創造と支配を認めることから、キリスト教神学には、次のような自然認識を生じさせる余地がある。すなわち、この自然界には人間の力量をもっては如何ともしがたい、神の定めた合理的秩序があるという認識である。

一見、複雑な自然現象も、けっして単なる雑多ではなく、複雑さの奥を貫いて整然とした合理的法則にしたがって動いていると信じられた。加えて、そこから自然の法則を知ることが、とりもなおさず、それを創り出した神の偉大さを知ることになるという思想が芽生えてきた。天地万物を神の創造物とみなし、自然法則の緻密さを知れば、その自然を創造した神が、如何にすぐれた知恵をもっているかが明らかになるだろう。<sup>1)</sup>



こういった思想から、自然＝宇宙こそ「第二の聖書」であるという見方が誕生した。すなわち神の創造物である自然を読み取ることが、神の言葉である聖書を理解するためにも必要なことである。自然の研究には、聖書の研究にも比すべき意義がある。自然は神の作品であり、したがって賛美されるべき、研究されるべきものである。<sup>②</sup>つまり自然の合理的秩序と宇宙の美を探究することによって、神を知ることができると考えたのであった。<sup>③</sup>イギリスのトマス・ティムが一六二二年に書いた次の一節は、当時の自然探究者の神と自然にたいする基本的な思考を端的に物語っている。

「天と地を生み出した全知全能の創造主は、二冊の最も重要な書物をわれわれの目の前に差し出された。一冊は自然という書物であり、もう一冊は聖書である。<sup>④</sup>」

こうして熱心なキリスト教徒の何人かの自然科学者が、その「第二の聖書」の解読に立ち向かった。それは天地万物、宇宙の法則を明らかにして、神の偉大さを世に証しようとして、強い使命感に動かされたからである。彼らの中の代表的人物を挙げれば、コペルニクスであり、ガリレオ・ガリレイであり、ニュートンであり、あるいはリンネであった。いずれにしても、近代科学の卓越した先駆者だが、同時に熱心なキリスト教徒であった。このように近代科学は、その誕生にあたって理論的正当性の根拠を神に求めたのであったが、同時にその科学は神の偉大な業を明らかにし、賛美し、神へ至る道でもあった。

マックス・ウェーバーは『職業としての学問』のなかで、「私はここに一匹のシラミを解剖し、皆さんに神の摂理を証拠だてて見せよう<sup>⑤</sup>」という一七世紀オランダの顕微鏡学者スワンメルダムという言葉を引用している。自然または宇宙を神によって創造されたもの、われわれがそこに神の偉大な業を読み取ることのできる一つの書物、いわば「第二

の聖書」であるという見解は、ガリレオ・ガリレイの『天文対話』のなかにあるトスカナ大公への献辞において、はつきり言及されている。

「より高いものを目指すものはより多く異なります。そして哲学本来の対象である自然、という大きな書物（傍点―引用者）に向うことは眼の向うところを高くする方法です。この自然の書物に読まれることはいずれも、全能な造物主の創られたものであつて非常によく均整のとれたものではありませんが、それでもやはり、造物主の仕事と仕業とをわれわれにいつそう偉大なものとして示すものは、いつそう完全で価値あるものなのです。そして宇宙の構成こそ、わたくしの信ずるところによると、知りうるあらゆる自然的事物のなかでも第一番目に価値あるものなのです。というのは、もし宇宙が普遍的な包括者として大いさにおいて他のすべてのものに先立っているとするならば、これはまたすべてのものを規制し維持するものとして、高貴さにおいても他のすべてのものに先立つべきでしょうから。」<sup>(6)</sup>

ここに見られるように、ガリレオ・ガリレイは宇宙または自然を、神によつて創られた見事な創造物、そこにわれわれが神の偉大な業とその素晴らしさを読み取るべき壮大な書物、つまり「第二の聖書」ともいうべきものとして見ていたのである。いい換えれば、自然の秩序や宇宙の美を探求することによつて神を知ることができる、要するに自然に秘められた原因を探ろうとしたのである。こうして神の偉大な業とその崇高さを読み取ることができると考えたのである。<sup>(7)</sup>

キリスト教徒であると同時に科学者でもあつた人々の気持ちをよく表わしている一つの言葉が、ジョン・ミ

ルトンの長詩『失樂園』のなかに述べられている。そこには、コペルニクス以降の近代の宇宙観がよく映し出されている。とりわけ第八章の最初の百数十行は、天使と人間の対話の形式で、さながら『天文対話』がそこに展開されていると言えるほどである。天使（ラファエル）の人間（アダム）に向かって語る言葉として、次の一節が述べられている。

「お前はいろいろ尋ね、探究することを私は咎めはしない。大空は、いわば神の書としてお前の前に置かれているからだ。

お前はそこに神の驚くべき御業を読み、その定め給うた季節、時あるいは日、月、年を知ることができる。

もし、このような知識に達するならば、計算に誤りがないかぎり、天が動こうが地球が動こうが、それは重要ではない。<sup>(8)</sup>」

すなわち自然現象の研究を、神の代理人たる天使は咎めたりはしない。宇宙とはほかならぬ神の記した書物であり、したがって、それを研究し、すぐれた業を学び、神によって決められた季節、年、月、日、時刻などのサイクルを知るがよい。そのために行った正確な計算の結果、地動説が正しいとなれば、それは一向に差し支えないことだ、と主張しているのである。このように見てくると、キリスト教神学の内容に、一面では近代科学と対立する要素を含みながらも、他面では科学活動を促進する誘因を含んでいたことも否定できないであろう。

これに関連していえば、修道院において科学活動が盛んに行われていたのは注目されてよいだろう。キリスト教の聖職者たちのなかにも、教師としてテクノロジーや科学に寄与した人々がいたのである。たとえばベネディクト会修

道士は農業科学や家畜の飼育、林業、金属加工、ガラス作りなどの実行技術の研究者であり教育者であり、(リン・ホワイト・ジュニアによれば)「爪を泥で汚した最初の知識人」であった。<sup>(9)</sup> 大修道院は腕のいい職人修道士を大勢抱えていた。たとえばアミアンに近いコルビー修道院には鍛冶職六人、縮絨工二人、金細工師二人、羊皮紙作りの専門家人、大工四人がいた。コルビーの北西、英仏海峡に近いサン・リキエ修道院には靴職人や鞍作り工がいた。ザンクト・ガレン修道院(スイス)の見取り図には木工職人、馬具職人、靴作り、鍛冶職、金細工師、縮絨工、刀剣磨き師などのための仕事場が示されている。<sup>(10)</sup>

- (1) 渡辺正雄『日本人と近代科学』、岩波新書、一九八一年、一七二頁。
- (2) 島尾永靖編著『科学の歴史』、創元社、一九八五年、一〇四頁。
- (3) J・ギース／F・ギース『大聖堂・製鉄・水車―中世ヨーロッパのテクノロジー―』(栗原泉訳)、講談社学術文庫、二〇一二年、一〇七頁。
- (4) アレン・ディーバス『ルネサンスの自然観―理性主義と神秘主義の相克―』(伊東俊太郎・村上陽一郎・橋本真理子訳)、サイエンス社、一九八〇年、二五―六頁。
- (5) マックス・ウェーバー『職業としての学問』(尾高邦雄訳)、岩波文庫、一九九九年、四〇頁。
- (6) ガリレオ・ガリレイ『天文対話』(青木靖三訳)、岩波文庫、上、一九九七年、一一―二頁。
- (7) J・ギース／F・ギース、前掲書、一〇七頁。
- (8) ジョン・ミルトン『失楽園』(平井正穂訳)、岩波文庫、下、一九八五年、四八―九頁。
- (9) J・ギース／F・ギース、前掲書、一〇九―一〇頁。
- (10) 同書、一一〇頁。

#### 四 近代科学の無神論的性格

コペルニクス、ガリレオ・ガリレイをはじめ、近代科学のすぐれた先駆者と呼ばれる人々が、ほとんど例外なく敬虔なキリスト教徒であったことは、既に述べたところである。しかし、こうした敬虔なキリスト教徒により先鞭をつけられた自然や宇宙の探究が、やがて後継者によって受け継がれていくうちに、先駆者たちの恐らく予想だにしないことになったであろう事態に直面するのである。それは、自然の正体が明らかになればなるほど、神の存在をあからさまに持ち出さないほうが、かえって自然現象を矛盾なく説明できるようになってきたことだ。<sup>(1)</sup>

こうして自然科学は、いつしか無神論的内容に転じていった。しかし神の存在が希薄になっても、神の創った作品である自然界に厳然たる法則があることを認識させ、その法則の探究欲を引き起こさせたことは、キリスト教神学の教義が近代科学に与えた大きな功績であろう。キリスト教神学の内部では、神の定めた整然とした法則の支配する自然は、支配の原理としての合理的な秩序をその本質として内蔵されていることが前提され、したがってまた不完全ながら理性を有する人間が、与えられた理性を駆使して、自然界に内蔵される神の意志と合理的秩序をわが物としていくことができるという、確信が芽生えてくる。<sup>(2)</sup> つまりキリスト教神学の世界観のなかでは、この自然が神の創った作品であるという前提の上に、そこに神の支配つまり創ったものにたいする創り主の計画的支配が読み込まれているという発想が顕著になり、加えて理性をもつ特別な被造物である人間が、その計画的支配を読み取って、それに参加したり、あるいはその代理を務めたりする権利を与えられる、という発想が生じてくると言ってもよいであろう。<sup>(3)</sup>

こうして人間の理性によって、およそ手の届かない摩訶不思議な自然ではなく、まさしく人間にとって理解可能で

あるような自然の様相がそこに浮び上がってくる。<sup>(4)</sup>「人間によって利用され支配されるべき自然」という、この新しい概念のもつ意義を十分な広さと深さにおいて、最も明瞭かつ雄弁に主張したのは、フランシス・ベイコンであった。<sup>(5)</sup>ベイコンはその著作『ノヴム・オルガヌム（新機関）』のなかで、「人間の知識と力とは、ひとつに合一する。……自然とはこれ〔知〕に従うことによらなくては征服されない」という言葉を残している。<sup>(6)</sup>

この言葉には科学は、それまでのスコラ学のように学問に終始する学問ではなく、自然を支配し、変革して人間生活の改善を目指すための営みであるという「技術としての科学」「技術のための科学」のスローガンが込められているのである。つまり「知は力なり」という言葉は、近代の科学と技術の融合を見事に象徴していると言えるだろう。<sup>(7)</sup>いい換えれば科学と技術の融合によって、自然を支配し、人類の欠乏と悲惨とを征服することが、彼の意図するところであった。

このベイコンの見解は、晩年のユートピア的著作『ニュー・アトランティス』のなかで語られている。ベイコンはユートピア「ニュー・アトランティス」のなかで、科学や技術に関する知識を収集し、研究する機関として「サロモン学院」を重視している。ベイコンは「サロモン学院」という理想的な研究機関の目的は、「事物の諸原因や秘密の運動に関する知識の獲得であり、それによって人間帝国の領域を拡大して、可能なあらゆることを成就することにある」と記しているが、「サロモン学院」には薬学、光学、音響、工業、農業、その他あらゆる実験室と科学機器が整備され、実験者と情報収集者が分業の原理によって組織されていた。「サロモン学院」というこの理想的な研究機関も、「ニュー・アトランティス」という理想郷もともに、ベイコンの学問の革新とその基礎にあるキリスト教的信念に支えられ、人類全体の幸福、福祉のために活動すべきものであった。

したがって彼のただ一つの基本的な関心は、人類の功利と福祉のために、物質の究極の法則と構造について科学的知識を得、それによってますます自然を実質的に支配していくのに必要な一般的方法を発見し、広めることにある<sup>9</sup>。ペイコンの時代は、分業に基づくマニユファクチュアが発展しつつあった。ここでは新しい技術が、つぎつぎに開発されており、技術の発達によって高まっていく生産力の将来にペイコンは人類のユートピアを見たのである<sup>10</sup>。こういうペイコンの理想が、やがて後期ステュアート王朝のもとで、先にも述べた王立科学協会（ロイヤル・ソサエティー）として実現されたことは、しばしば指摘されている<sup>11</sup>。

このペイコンの立場は、近代哲学の父といわれるデカルトの機械論的自然観においても、本質的に変わってはいない<sup>12</sup>。機械論的自然観には生命も意志も入り込む余地がない。自然を機械と見なすことによって、人間が自然の力を手段として、あるいは道具として利用することを可能にする。これが近代科学の態度であり、科学が自然を支配し、利用する技術を生むことになる<sup>13</sup>。この辺のことをデカルトは、次のように言っている。

「この哲学によつて火、水、空気、星、天の、その他の私どもを取り巻くあらゆるものの勢力と作用を、私どもは判然と認識するのである。ちようどそれは、私どもの職人たちにはそれぞれ独自の技能のあることが、何びとの眼にも判然と見分けられるのと同じようなものである。こうして諸々の勢力ならびに作用をそれぞれに固有な用法において私どもが用いることができ、私どもを自然界の主人にして所有者のごときものとなしうることを、この哲学は私に示してくれる。そしてこのことは、土地から生まれるものを、そこに見い出されるあらゆる利便を、何んの苦勞もなく享有させるところの、尽くることなき技術的發明のためのみならず、疑いもなくこの人生の第一の財産で、また他

のあらゆる財産の基礎でもある健康の維持のためにこそ望ましいのである。<sup>(14)</sup>」

こうしてバイコンやデカルトの科学や哲学によって自然から価値が剥奪され、自然の階層的・調和的秩序が「人間によって利用され、支配されるべき自然」に変革された。その結果、神から最も卑小な存在物にまで至る存在の階層的な連鎖は、ついに断ち切られた。<sup>(15)</sup> このことの意味を科学史家アレクサンダー・コイレは、次のように要約している。

「このような科学・哲学革命——この過程の哲学的側面をその純粹の科学的側面から分離することは確かに不可能である——は、大きくいつてコスモスの解体をもたらしたものといえる。すなわち有限で、閉ざされた、そして階層的に秩序づけられた全体（そこにおいては、暗く、重く、不完全な地球から次第により高い完全性をもつ星や天体にいたるまで、価値の階層構造が存在の階層構造を決定していた全体）としての世界という考え方が、哲学的、科学的に有効な概念でなくなり、その代わりに基礎的な構成要素と法則の同一性によって結ばれ、そこにおいては、これらすべての構成要素が存在の同一レベルに位置づけられている無際限の、いな無限の宇宙が登場したことになる。これは逆に、完全性、調和、意味、および目的のような価値概念に基づくすべての考慮が科学的思考によって捨て去られたこと、究極的には存在が完全に価値を剥奪され、価値の世界と事実の世界が断絶したことを意味する。<sup>(16)</sup>」

さてバイコンやデカルトの主張どおり、人類は自然の合理的秩序に関して知識を得ることを介して、自然を支配し、



制御する力を手に入れた。これは一方からいえば、自然界から神を追放し、人類が神の位置に代って座るといふ主権の交代現象を意味しているし、中世から近代への移行は、まさしくこの神と人との主権争いにおける人間の勝利として規定される傾向にあることは否めない。だが視点を換えてみれば、実は神の占めていた位置に人類が座るといふことは、自然の構造の革命的变化を志向するものではなく、むしろキリスト教的な自然観は、構造としては相変わらず完全な形で保持されたと見るべきである。支配者の地位に誰が着くにせよ―それが神であれ、人間であれ―自然は支配され、制御されるべき対象であるという思想そのものは、牢固として残されたのである。

こうしてキリスト教神学の思想は、自然界が合理的秩序のなかに置かれていること、そして人間は与えられた理性によつて自然のなかの合理的な秩序を追究することができるとともに、その追究を通じて知識を介して自然を自分の都合のよいように制御し、支配する技と力を獲得することができること、こうした近代の西欧合理主義と近代の科学技術を根底から支える思想上の基盤を提供することに成功したわけである。<sup>(17)</sup>だが先に述べたガリレイの言葉に象徴されるように、近代科学の創始者たちの自然探究は、神の言葉を自然のなかに求めるといふ動機を、その根底の基盤としていた。ベイコンが「知は力なり」と力説しても、その力は未だ抽象的な意味が強く、自然探究によつて得られた知は人類のために、人類の手のなかに委ねられたものという意味は希薄であつた。このような神の手に仮託された自然についての知を人類のために人類の手のなかに帰属させようと図つたのは、一八世紀の啓蒙思想家であつた。<sup>(18)</sup>

(1) 村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』、新曜社、昭和五四年、一三三頁。

(2) 和辻哲郎は、名著『風土』のなかで、西欧と日本の自然現象をさまざまな面から比較検討し、ヨーロッパの特徴を、その

合理性にあるという。西欧のような暴風の少ない所では、樹の形が合理的になる。すなわち自然が暴威を振わない所では、自然は合理的な姿に己を現わしてくる。自然が従順であることは、自然は合理的であることに関係してくる。人は自然のなかから容易に規則を見い出すことができる。そうしてこの規則に従って自然に臨むと、自然はますます従順になる。このことが人間をしてさらに自然のなかに規則を探究せしめるという。このように自然現象の視点から見ても、ヨーロッパに近代科学が生ずる理由も容易に理解される。（和辻哲郎『風土——人間学的考察——』、岩波文庫、一九八五年、九一—二頁。）

- (3) 村上陽一郎『文明のなかの科学』、青土社、一九九七年、一〇六頁。
- (4) 村上陽一郎『科学・哲学・信仰』、レグレス文庫、一九八五年、六五頁。
- (5) Cf. Edgar Zilsel, "The Genesis of the Concept of Scientific Progress," *Journal of the History of Ideas*, ⑥, 1945, pp. 325-49.
- (6) ベイコン『ノヴム・オルガヌム（新機関）』（桂寿一訳）、岩波文庫、一九八五年、七〇頁。
- (7) 前田達郎「ベイコンの科学思想——「知は力なり」という思想の意義——」（花田圭介編『フランシス・ベイコン研究』、御茶の水書房、一九九三年、所収）、一九七—二二五頁を参照。
- (8) フランシス・ベイコン『ニュー・アトランティス』（中橋一夫訳、『世界の大思想』⑥、河出書房新社、昭和四七年、所収）、四二六頁。
- (9) H・バターフィールド／W・L・ブラック他『近代科学の歩み』（菅井準一訳）、岩波新書、一九八四年、四一頁。
- (10) 平野喜一郎『社会科学の生誕——科学とヒューマニズム——』、大月書店、一九八一年、一三四頁。
- (11) 水田洋『思想の国際転位——比較思想的的研究——』、名古屋大学出版会、二〇〇〇年、二八頁。
- (12) 梅原猛『文明への問い』、集英社文庫、昭和六二年、二九四頁。
- (13) 赤木昭三・赤木富美子『サロンの思想史——デカルトから啓蒙思想へ——』、名古屋大学出版会、二〇〇三年、一四〇—一頁。
- (14) デカルト『方法序説』（落合太郎訳）、岩波文庫、一九八四年、七六頁。
- (15) 甚野尚志、前掲書、二六五頁。

- (16) Alexander Koyre, *From the Closed World to the Infinite Universe*, 1982, p.2. コイレ『コスモスの解体―閉ざされた世界から無限の宇宙へ―』(野沢協訳)、白水社、一九七四年、一五頁。
- (17) 村上陽一郎『科学・哲学・信仰』(前出)、六六頁。
- (18) 古川安『科学の社会史』、南窓社、一九八九年、八五頁。

## 五 一八世紀の啓蒙主義の特徴とその普及

啓蒙主義の思想は、一七世紀後半のイギリスに芽生え、一八世紀半ばのフランスにおいて大きく発展し、さらにやや遅れてドイツに拡大していった<sup>①</sup>。したがって一八世紀の啓蒙思想は基本的には、まずニュートン力学の確認と大陸への移植という作業に始まったと言ってよいだろう。一六八七年にニュートンの『プリンキピア』が刊行されたが、このニュートンの運動力学のもつ意味をいち早く理解し、その啓蒙に尽力したのは、ヴォルテールであった<sup>②</sup>。理神論者であり熱心なニュートン主義者であったヴォルテールは、世界秩序の知的創造者としての神の存在は認めたが、人格神を認めず聖書の矛盾を暴いた。若き日にパリを追放され、亡命先のイギリスでの体験をもとに母国フランスの後進性を批判して著した『哲学書簡(イギリス便り)』のなかで、彼はこう記している。すなわち「私は哲学の光に基づいて述べているのであり、信仰の啓示に基づくものではない。人間的見地から考えることだけが、私の義務である。……理性と信仰とは相反するものである<sup>③</sup>」と。

ところでニュートンの運動力学は、それまでとかく天界と地上界との二つに分けられて論じられがちであった運動

の問題を、あらゆる場面に、あらゆる運動に共通に適用できる形で解いたという画期的な意味をもっていた。<sup>(4)</sup> まさしく詩人アレキサンダー・ポープによつて「自然と自然の法則は夜の闇に隠れて眠っていた。神がニュートンよ来たれと呼ばれた。すると光がすべてを明るく照らした」<sup>(5)</sup>といわれるように、全世界の運動現象は、わずか三種類の運動に關する法則によつて、原理的には完全に描き尽されるものとなつた。<sup>(6)</sup>

いずれにせよ、ヴォルテールを始めとする初期のフランス啓蒙思想家は、ニュートン力学の大陸への紹介という仕事に身を投じた。だが彼らは、ニュートン力学にたいする絶対的信頼をもっていたが、もはや前世紀の科学者たちのように、そうした自然界の合理的な秩序を神の言葉、神の意志として受け取ろうとしない傾向のなかにあつた。<sup>(7)</sup> フランス啓蒙思想家のすべてが無神論者であつたわけではないが、彼らは期せずして、科学的な知識を神の手から人間の手に引き戻すことを意図していた。いい換えれば、もはや蒙昧な迷信や幻想をもとにして科学的知識を説くことはできなくなり、すべての事柄は検証可能な明晰・判明性を備えていなければならないと主張したのである。<sup>(8)</sup> 要するに、神への信仰と自然探究とを完全に切り離そうとしたのである。<sup>(9)</sup>

彼らにとつては科学の実用化、世俗化こそが、まさしく啓蒙の意味と受け取られた。フランス啓蒙思想家は、ニュートン力学という新しい体系を、いつその成功へと導くため、新しい事実群の収集に大きな関心を寄せていた。こうした啓蒙思想家としての態度は、ヴォルテールのみならず、いわゆる「百科全書派」のデイドロ<sup>(10)</sup>やダランベールなどにも共通するものであつた。政府や教会の妨害を受けながらも、デイドロやダランベールらが一五〇人も執筆者の協力を得て編纂刊行した『百科全書』は、当時の科学と技芸の知識を総合的にまとめあげた野心作であつた。<sup>(11)</sup> この『百科全書』は原理というよりは、上述のようにむしろ実用的な知識であり、科学的知識の実用化、世俗化の意図

をもって編纂されたものである。別言すれば、地上に散在している知識を集成し、現在および未来の人類に伝え、それによって彼らがより有徳で幸福になる願いを込めて書かれたこの労作は、いわば啓蒙主義思潮のマニフェストであった。すなわち一八世紀の啓蒙主義の時代になって、人類は始めて自然科学を本当の意味で自分自身の功利、福祉のために利用するという態度を手に入れたのである。<sup>(12)</sup> この啓蒙の思想こそ「ヨーロッパ・イデオロギー」の核心にあるものである。<sup>(13)</sup>

それに伴って、科学技術によって人類は着実に進歩していくという進歩の概念が芽生えてくる。一七世紀の科学者たちの発想が、むしろ自然史にたいしては終末論的なペシミズムが強かったのに比べて、啓蒙主義時代の科学者たちは、楽観的態度で人類の進歩を確信し、その進歩を推進する最大の力を科学技術に求めたのである。<sup>(14)</sup> ここに至って、近代科学は始めて人類社会にたいして、決定的な影響をもつに至ったといつてよい。<sup>(15)</sup> 古代社会では、進歩という概念は希薄であった。逆に、歴史は特定の方向性をもたないとする見解が一般的であり、仮に方向性があったとしても、それは歴史を黄金時代から衰退として捉えたものであった。古代および中世ヨーロッパのキリスト教の世界観でもまた、人間がエデンの園で罪を犯して以来、世界は転落の一途をたどっており、地上の楽園は再び戻ることはないときれていた。<sup>(16)</sup> 一五世紀から一六世紀の思想家の多くもまた、古代文化を再発見したにもかかわらず、自分たちの時代は尊敬するギリシャ・ローマ時代に比べて、文化的な視点だけでなく、公共心、道徳、勇氣の点でもはるかに劣っていると考えていた。

一七世紀末になって、科学的知識の増大と技術の着実な進歩によって、歴史とは衰退ではなく進歩の記録であるとする見解が、思想家たちの間に広まっていったのである。そして一八世紀の啓蒙主義の時代になって、如何なる分野

でも未来、そして進歩の必然性に関する楽観論が定着したのである。<sup>(17)</sup> したがって思想家たちは、「私たちの世紀は日ましに啓蒙されてゆくから、それに比べると以前のあらゆる世紀は暗黒としか見えないだろう」と堂々と言ったのであつたのである。<sup>(18)</sup>

「人間性の完成」を信じていたウィリアム・ゴドウィンは、一七九三年に代表作『政治的正義』のなかで、バラ色の未来をこう説いている。すなわち「地球上で人間の住みうる面積の四分の三は、まだ未開拓である。耕作技術の進歩、そして地球の生産性向上の可能性は、われわれの憶測の到底およぶところではない。たとえばるか未来に至るまで人口増加が続いたとしても、地球は人間を支えていくことは可能であろう<sup>(19)</sup>」と。

進歩の必然性に関する楽観論は、同年にコンドルセによって著された『人間精神の進歩に関する歴史的展望の素描』のなかで、その頂点に達する。<sup>(20)</sup> すなわちコンドルセは、フランス啓蒙思想において、進歩の観念の系譜を最後に飾る人であつた。コンドルセのこの著作は人間の可能性、そして人間の進歩の無限性を信じた彼の所信表明ともいふべきものである。それは次の一節に凝縮されている。「人間の可能性は、まさに無限である。それを妨げるものは、地球自体の寿命をおいてほかになく……進歩は……地球が宇宙において現在の位置を占めているかぎり逆転することはない。<sup>(21)</sup>」これとともに人類社会の歴史は、未開社会から今日の状態を通じてより理想的な社会へと、漸進的ではあるにせよ、確実によりよい方向に向かつて前進を重ねているという確信が表明されている。<sup>(22)</sup>

彼にあつては、人間と社会の進歩がもたらす未来を幸福なものとして強く確信していた。<sup>(23)</sup><sup>(24)</sup> 彼がフランス革命にコミットしたのは、まさしく、こうした楽観主義に基づいた行動であつたと予想される。事実、フランス革命が科学技術にたいして寄せた楽観的信頼は、エコール・ポリテクニクの設置を始めとするさまざまな科学技術振興政策に鮮明に表

われている。<sup>(25)</sup> このコンドルセの思想は、さまざまなヴァリエーションを生みつつ、一九世紀に受け継がれた。サン・シモンらのユートピア思想、コントの社会学、ヘーゲルの歴史哲学、マルクス主義、あるいはダーヴィニズム、その他ありとあらゆる一九世紀ヨーロッパ思想が、何らかの形で、このコンドルセの思想と繋っている。否、一九世紀ばかりでない。今日のわれわれの科学技術を考え、人類の歴史とその未来を考えると、その暗黙の前提的理解となつているのが、実は、コンドルセを含めた啓蒙主義時代のフィロゾフたちの発想なのである。<sup>(26)</sup> 二一世紀においても、進歩の思想は依然として人間の本質として広く受け入れられている。科学技術の力は、物質や知識の水準を飛躍的に増大させ、それを進歩と呼んできた。高い消費水準を達成し、強大な自然界を改造する能力をもつことが重要な目標とされた。人間は自然を無限の資源を提供するものと見なし、それらを利用して商品を生産し快適な生活を営むことこそ進歩だと信じてきた。進歩とは、とりもなおさず有益なものであり、すべての人間社会が目指していくべきものとされた。そして進歩は何よりもまず経済的進歩⇨経済発展と関連づけられた。こうして一八世紀の啓蒙期の進歩思想は、自然を破壊し、他の社会を自分たちの目的に合うように変革し、世界中の天然資源を収奪するといった西歐人の行動を自己正当化するための理論を提供したといえる。<sup>(27)</sup>

- (1) 西嶋幸右『専制君主と啓蒙思想家——一八世紀のフランス——』、歴史新書、教育社、一九八九年、一五頁。
- (2) 泉谷周二郎『地球環境と倫理学』、木鐸社、一九九三年、二六四頁。
- (3) ヴォルテール『哲学書簡』(中川信訳、『ヴォルテール、デイドロ、ダランベール、世界の名著<sup>35)</sup>』、中央公論社、一九八〇年、所収)、一二四頁。
- (4) 高野義郎『ヨーロッパ科学史の旅』、NHKブックス、昭和六三年、八五—六頁。

- (5) バジル・ウィリー『イギリス精神の源流』（樋口欣三・佐藤全弘訳）、創元社、一九八一年、二五〇頁。
- (6) 広重徹・伊東俊太郎・村上陽一郎『思想史のなかの科学』、木鐸社、一九八四年、一二九頁。
- (7) ランダルによれば、ニュートン力学の成功とともに、世界は機械、なかならず時計にたとえられるようになったという。  
(J. H. Randall, Jr., *The Making of the Modern Mind*, 1976, p.227.)
- (8) 小林敏明『廣松渉―近代の超克―』、講談社、二〇〇七年、四八頁。
- (9) 社会科学においては、人間生活Ⅱ社会の自律性は、まず人間の理性を神の意志から、また神を信ずる人間の意志からさえ、切り離すことによって可能になったのである。（水田洋、前掲書、一一九頁。）
- (10) 風真木剣『ドゥニ・デイドロの回想―『百科全書』をつくった男―』、悠書館、二〇一三年を参照。
- (11) J・プルースト『百科全書』（市川慎一・平岡昇訳）、岩波書店、一九八〇年を参照。
- (12) 広重徹・伊東俊太郎・村上陽一郎、前掲書、一二二頁。
- (13) 佐伯啓思『イデオロギー／脱イデオロギー』、岩波書店、一九九五年、二〇頁。
- (14) ロイ・ポーター『啓蒙主義』（見市雅俊訳）、岩波書店、二〇〇四年、二五頁。
- (15) Cf. Sidney Pollard, *The Idea of Progress*, 1968, ch.2., シドニー・ポラード『進歩の思想―歴史と社会―』（舟橋喜恵訳）、紀伊国屋書店、一九七一年、第二章参照。
- (16) クラウド・ポンティング、前掲書、二四四頁。
- (17) 同書、二四五頁。
- (18) ポール・アザール『ヨーロッパ精神の危機』（野沢協訳）、法政大学出版局、一九七八年、三九二頁。
- (19) ウィリアム・ゴドウィン『政治的正義』（加藤一夫訳）、春秋社、昭和五年、四七八頁。
- (20) ロイ・ポーター、前掲書、二九頁。
- (21) クラウド・ポンティング、前掲書、二四六頁より引用。
- (22) G. Barraclough, "Universal History," in H. P. R. Finberg (ed), *Approaches to History*, 1962, p.84.



- (23) ホーイカースはいう。「コンドルセを満たしていたのは、人類の未来に関する果てしない楽観主義であった。つまり限らない科学の進歩は、人間の不幸の根源をとり除き、万人に幸福をもたらすであろうと。宗教、迷信、聖職者、専制君主らは、科学と理性の進歩の前に、没落し続けるであろう。啓蒙と自由とは、偏見に基づく人間の奴隷状態にとって代わるであろう」と。(R・ホーイカース他『OU科学史Ⅱ、理性と信仰』(藤井清久訳)、創元社、昭和五八年、四〇頁。)
- (24) 安藤隆穂『フランス啓蒙思想の展開』、名古屋大学出版会、一九八九年、一七一頁。
- (25) 村上陽一郎『文明のなかの科学』(前出)、四三頁。
- (26) 村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』(前出)、一四二頁。
- (27) クライブ・ポンティング、前掲書、二六〇頁。

## 六 結びにかえて

先述のように近代科学から生まれた科学技術を背景にもつ西欧文明は、富や生産力の増大という点において驚くべき力を発揮した文明であった。スミスもマルクスも同様、この科学技術文明のつくり出す物質の信者なのである。物質を数量化して正確に認識し、その認識によって物質を人間の意志に従って支配する。そしてその支配によって物質は、人々に驚くべきエネルギーを提供する。今まで人々の周囲で眠っていた物質が、近代科学によって驚くべき巨大なエネルギーの供給者になったのである。そしてこの西欧文明は、それを形成し推進した西欧人に二つの力を与えた。一つは「経済力」であり、もう一つは「軍事力」である。この経済力と軍事力によって、西欧は世界を征服し、世界を西欧諸国の支配下に置いた。そしてこの西欧諸国の世界支配の下に、今まで多くの文化圏に分かれていた世界が、

始めて一つの世界になった。<sup>(1)</sup>

しかし今や先にも触れたとおり、西欧文明、科学技術文明、そしてその基礎にある啓蒙主義への疑問が、世界の人々の間で生まれてきている。それは近年、われわれが生活しているこの地球において環境問題が大きくクローズ・アップされてきたからである。<sup>(2)</sup> いい換えれば人間生活の豊かさを目指した西欧文明、科学技術文明が、逆に人間自身の生活を脅かし始めているからである。<sup>(3)</sup> 科学技術のマイナスの効果が明らかになってきたからである。だが一八世紀のフランスにおいて、先見の明をもって啓蒙主義の「光」と「影」の二面性をしつかり見据えていた人物がいた。百科全書家ダランベールその人である。彼は次のような含蓄に富む言葉を残している。

「自然科学は日に日に新しい富を蓄積するし、幾何学は自らの領域を拡大することによって、隣接する物理学の分野に光明をもたらした。世界の真の体系がついに発見された。……要するに、この地球から土星まで、天体の歴史から昆虫の歴史まであらゆる点で自然科学は革命された。そしてそれとともに、その他のすべての科学も新しい様相を呈し始めた。だが自然科学によってもたらされたこの精神的高揚は、自らの枠のなかで止まらなかつた。それはあたかも奔流のように堤防を破壊し、あらゆる分野にほとばり出た。世俗的学問の原理から啓示の基礎に至るまで、形而上学から趣味の問題まで、音楽から道徳まで、神学者たちのスコラの論争から経済的問題まで、自然法から実定法まで、要するにわれわれに最も直接関係するもろもろの問題から、まだ当面は間接的に関係するだけの問題まで、あらゆる問題が議論され分析され、少なくとも論及された。多くの対象のうえに投げかけられた新しい光明、それとともに発生した新しい暗雲、それがこの精神の普遍的運動の果実であり、成果であつた。それらはちょうど潮の干満の作

用が多く、ものを海岸に打ち上げ、他の多くのものを運び去るのと同様である。<sup>(4)</sup>」

ダランベールのこの文章を、近代の科学技術の高らかな勝利の謳歌と取ることは容易であろう。だがこの文章には、二つの重要な点が含まれている。一つには、近代の科学技術が、すべてのものを呑み尽くす狂暴とまで言えるような拡張力をもっていること、もう一つは、それが「新しい富」と「新しい光明」とを与えてくれると同時に多くのものを人間から奪い去るものであること、この二つをダランベールは洞察していたことである。さらに付け加えれば、確固たる信念や目的もなく、ただ単に物質的環境を支配したことから生じた富や生産力の増大という幻想に酔い痴れ、繁栄を謳歌した一七世紀末のイギリス社会にたいして、イギリスの経済史家トニーは、次のような警告を発している。「人類は自然からその秘密を引<sup>(5)</sup>張り出すこともできるが、その秘密を知ったために、それを用いてみずからを破滅せしめてしまう場合もある」と。

この言葉は、科学技術のもたらしたさまざまな害悪、歪みに悩まされ、解決に苦慮している現代社会に向かって打ち鳴らされている警鐘のようである。人間生活と科学技術との調和、人間生活と自然環境との調和を考えていく上で、一七世紀初頭のキリスト教的信念に支えられて誕生した近代科学、人類の幸福の増進、人間の福祉の増大を旗印に掲げ、「光」の側面を強調してきた啓蒙のイデオロギー、そしてこれらを土台として形成されてきた科学技術を背景にもつ近代の西欧文明の本質を新たな眼で見直す必要があるのではないだろうか。持続可能な社会を子孫に残すために、人類の英知を結集してわれわれは、地球環境問題に取り組みなければならない。<sup>(6)</sup>地球環境問題を解決しなにかぎり人類に未来はなく、そのためには後にも述べるが生活態度を一変し、経済成長至上主義を捨てるべきである。だが実際

には、日本や他国の経済人、企業経営者は、口では環境問題が大切であるといいながらも、経済成長が鈍ることを恐れ、解決のための行動を先延ばしにしようとしているのが現状であろう。

ところで広域化し、深刻なものとなった地球環境問題の解決のために、近代の西欧文明の根本的な欠点を克服しようとする思想的提案や主張が、アメリカを中心に環境倫理学<sup>⑦</sup>という学問分野において起こってきている。これに関連して、ここでは仏教の自然観を概観してみよう。芹川博通氏によれば、仏教の自然観は、インド思想や中国思想、さらには日本思想などの影響も受けながら成立してきたものであるという。

そして仏教の自然観を構成する思想を大別して、二つに分ければ、その一つは万物は同一の根源より生じたとか、人間と自然は生命共同体とする思想、諸法実相、天地同根、万物一体観、有情・無情仏性説、草木成仏説などが挙げられる<sup>⑧</sup>。これらは人間は自然と「ともに生きる」とする、すぐれた環境倫理の思想を示している。ここでは人間と自然は、同一の生命共同体と考えられ、この両者は対等な関係にある。有情にも無情にも、ともに仏性が存在するという仏教の自然観は、仏教が人間中心の見解を取らず、両者を同等に考える見方に基づいていることを物語っている<sup>⑨</sup>。他の一つは、山の神、樹の神、草の神、龍神、自然神、山岳信仰、森信仰、阿弥陀仏・大日如来、自然即仏、無情説法などが挙げられる。人間が自然の一員であると自覚したとき、人間は自然をある種の神的存在として畏敬し、自然を信仰対象としたり、また各種の自然信仰を生み出してきた。こうした仏教の自然観に立つならば、人間は自然によつて「生かされる」あるいは「生かされている」という環境倫理思想へ展開することになる。そしてこの思想を「生かされている」思想とすれば、「ともに生きる」思想から「生かされている」思想への転換は、現代の環境問題を考える際に、人間と自然のあり方を解く二つの思想とその道筋・進路を示すものである。

この二つの思想は、ともにすぐれた環境倫理思想であるが、人間が今日直面する人類生存の危機を認識するならば、人間と自然との関係は「ともに生きる」思想を進めて、人間が自然によって「生かされている」思想を素直に受け入れる必要がある。この「生かされている」思想は、人間中心主義の完全な放棄であるとともに、人間性や人間の生存を否定することになるような科学技術の異常な発達にたいして、思い切った規制の必要性を示唆するものである。<sup>10</sup>「生かされている」という自覚が芽生えたとき、人間が謙虚で敬虔になれる切っ掛けかも知れない。「生かされている」と気づくことが大切なのである。<sup>11</sup>

最後に仏教的視点と同時に経済学の視点からも、環境問題解消の一助として若干の提案を試みたい。さて西欧文明は、キリスト教的自然観に源をもつ近代科学技術を基盤にして資本主義社会をつくり出し、技術革新を重ねることによって機械制大工業の時代を出現させ、巨大な生産力と物質文明をつくり出してきた。しかし飽くなき経済成長または生産力の向上は、地球環境問題を考えてみるならば、いまその反動を被っていると言つてよいだろう。自然と人間の営みの再生産を無視しては社会の存続は、ありえないということが広く認識されている。人間が自然を支配したり、自然をつくり変えるにしても、自然の再生産つまり摂理を破壊してまで、そうすることができないのである。

そのことを訴えているのが、現在の地球的規模の環境危機である。この環境危機に伴って人類の危機が生じ、社会の存続さえ危なくなっている現在では、資本活動または企業活動は抑制される必要がある。そのためには、資本活動の負の所産としてたえず生ずる外部不経済を資本の負担とすること、加えて環境（自然）破壊が小さく、よりの確にそれらを是正しうる適正規模の企業活動などが当然必要になる。<sup>12</sup>また人々の生命が守られるためには、利潤率が低下し、経済成長が鈍化することも甘受しなければならぬ。人々の暮らしを物質的豊かさに求めるのではなく、人間

的・精神的豊かさに求め、自分たちの暮らしを洗い直して見る必要がある。その場合、シューマッハーが述べた「文明の核心が欲望を増長することではなく、人間性を純化することにある」<sup>(13)</sup>と考える仏教経済学も有益な示唆を提示してくれるであろう。<sup>(14)</sup> 従来の生活を変えることによって、われわれは自然と人間が共生、共存しうる社会、あるいは自然のなかで「生かされている」という謙虚な気持ちをもち、少欲知足をモットーにした暮らしのできる社会を構築しうるかも知れない。

その意味で、「定常状態」を忌み嫌うべき社会と考えた経済学者リカードとは逆に、J・S・ミルが「定常状態」においてこそ経済的進歩ではなく、精神的・文化的側面での人間的進歩が可能になると考えたことは、高く評価しなければならぬ。<sup>(15)</sup> われわれは、今こそ、英知をもって人間的進歩の内容、人間の生きることの意味を考え、実行すべき時期にいる。<sup>(16)</sup>

- (1) 会田雄次『合理主義』、PHP文庫、二〇〇〇年、第三章を参照。
- (2) 佐和隆光『成熟化社会の経済倫理』、岩波書店、一九九三年、第六章を参照。
- (3) 増谷文雄・梅原猛『知恵と慈悲』、角川文庫ソフィア、平成九年、二三五―三二六頁を参照。
- (4) E・カッシーラー『啓蒙主義の哲学』（中野好之訳）、紀伊國屋書店、一九七六年、五六頁より引用。
- (5) R. H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism*, 1955, p.232. トーニー『宗教と資本主義の興隆』（出口勇蔵・越智武臣訳）、岩波文庫、下、一九九三年、二二七頁。
- (6) Cf. Edward Goldsmith, *The Way*, 1992, p.xi.
- (7) 環境倫理に関する文献としては、たとえば次のものがある。藤原保信『自然観の構造と環境倫理学』、御茶の水書房、

一九九一年。

- (8) 梅原猛・庭野日鑽『仏教を世界へ』、佼成出版社、平成一九年、一三三―一三七頁。
- (9) 栗田勇『雪月花の心』、祥伝社、平成五年、三〇―三二頁。
- (10) 芹川博通『環境・福祉・経済倫理と仏教』、ミネルヴァ書房、二〇〇二年、五四―五頁。
- (11) 梅原猛・稲盛和夫、前掲書、二二―四頁。
- (12) E・F・シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル』（小島慶三・酒井懋訳）、講談社学術文庫、一九九七年、第一部第五章を参照。
- (13) 同書、七二頁。
- (14) 井上信一『地球を救う経済学―仏教からの提言―』、すずき出版、一九九七年を参照。
- (15) J. S. Mill, *Principles of Political Economy, Collected Works of John Stuart Mill*, edited by J. M. Robson, Vol. III, 1965, pp. 752-7. ミル『経済学原理』（末永茂喜訳）、岩波文庫（4）、一九六一年、一〇一―一二頁。
- (16) 人間の精神的進歩や生きることの意味、人生哲学に関して、さしあたり次のものを参照。山本常朝『葉隠』（和辻哲郎・古川哲史校訂）、岩波文庫、一九九八年、洪自誠『葉根譚』（中村璋八・石川力山訳注）、講談社学術文庫、一九九六年。